［Get off of NP］の概念研究

――認知言語学的アプローチ――

森　山　智　浩

1．研究意義

本稿では，一貫して，“leave a place”や“tell someone to stop touching something or someone”といった意を表示する句動詞［（TR）get off of（LM）］（以下，［get off of NP］と記載）に関し，その形態と意味との概念的関係を論考する。

以下⑴―⑵に示されるように，［off of NP］自体の意味用法は主に「米略式」として口語表現で好まれるとされる。

⑴　off, off of, from は交換して用いることができる：He jumped *off*［《米略式》off of, from］the roof. 彼は屋根から飛び降りた．off of は冗語的とみなされ書き言葉では避けられるが，O が前置詞と離れる場合には多く用いられる：Which bus did he get *off of*？　距離を感じさせる場合には from が好まれる：launch a rocket *from*［×off］Cape Canaveral ケープカナベラルからロケットを発射する．

―*GEJD*（s.v. off, *prep.* 1）（下線筆者）[1]

⑴「距離を感じさせる場合には from が好まれる」とする概念的理由について詳しくは，本論にて後述。

⑵　off from［or of］（話）～から（離れて）
この表現は冗長で off だけを前置詞として用いるほうがいいとされるが，演説などでは多用される
—*RHED*（s.v. off of）（下線筆者）

また，*LDCE* に至っては，その使用を戒める記載も見受けられる。

⑶　not on something, or removed from something. . .　Don't say 'off of' something.　Say **off** something: *She fell off her chair* (*NOT off of her chair*).
—*LDCE*（s.v. off, *prep.*, 2）（一部省略・下線筆者）

それ故，［get off of NP］もインフォーマルな意味用法としてみなされることになる。

しかしながら，米略式としてインフォーマルな表現であるにせよ，それが広く使用されるには，発信者と受信者とのあいだに共通して認められる何らかの（形態と意味との）整合性が各々の認知的意識に存在しているに違いない。たとえば，上述⑴の「Ｏが前置詞と離れる場合には多く用いられる」とする点においてさえ，その枠組み内だけでは収まり難い事例も散見される⑵。下記⑷—⑸がその実例である。

⑷　Rory: Miss Patty's punch is used to clean tar *off of construction sites.*

⑵　Google サーチをかけても，［get off of］で約21,100,000の件数が，また，［got off of］で約4,510,000の件数がヒットする（2019年３月２日現在）ことからも明らかなように，非標準形態ではあるにせよ，その使用・運用は広範囲に及んでいる事実が確認される。

Paris: So let it clean the tar *off of our souls.*

—TV シリーズ *Gillmore Girls,* Episode: “That's What You Get, Folks, for Making Whoopie”（2012）（イタリック体筆者）

⑸ Hattie: You let go of me, Dutch Muller !

Dutch Muller: Aw, quit your kiddin'. You know you love it !

Hattie: Take your hands *off of me* ! I hate the touch of ya !

Dutch Muller: Oh, I suppose you like the touch of that dressed up can of tuna, huh ?

—映画 *Riffraff*（1936）（イタリック体筆者）

言葉を換えれば，“leave a place”や“tell someone to stop touching something or someone”といった意を表示するために，各構成語は言語の経済性の観点から有機的に関わり合って無駄なく活用されているはずであり，［get off NP］では表し得ない［＋α］の概念がそこに加味されていると考えられる。

そこで，本稿では，主に認知言語学的視座から，分離事象表示の［get off of NP］における形態と意味の概念的関係に光を当て，get, off, of 各々がその全体の意を表示する構成語でなければならない，また，その語順でなければならない必然的理由を見つめることで，（当該表現を使用する）英語母語話者の認知側面の一端を明らかにすることに主眼が置かれている⑶。

⑶ イディオム表現・連語表現が表示する意味生成のメカニズムを解明するアプローチとして，認知言語学では「各構成語の意味の総和以上のものである」とするゲシュタルト的視座が導入されることが少なくない（cf. 河上（編）（1996: 1–5））。これは「構成性の原理（PRINCIPLE OF COMPOSITIONALITY）」との対照をなす見地に立脚するものである。しかしながら，語句の意味変化を明らかにするには，そうした二極論でなく，むしろ，「各構成語が持つ概念が有機的に関わり合うと同時に，そこから想起される身体経験もしくは社会・文化的経験↗

２．先行研究の考察

第一章では，［get off of NP］が標準形態ではないことが確認された。たとえ各構成語が有機的に関わり合って無駄なく活用されていると推論されるにせよ，（主に意味論的視座から見た）その統語的整合性の是非を考察することもなく「概念上の理由から」というだけで論を進めることは能わない。

この点も含め，筆者が知る限り，［get off of NP］の概念そのものを詳細かつ体系的に論考した学術研究は存在していない。たとえば，*DELP* においてさえ，（非標準表現であることや紙面の都合の問題も関係しているであろうが）get の項目内で［get off of NP］に言及されている記載は見受けられない(4)。

(1) メト［原因で結果◀１］〈人・物が〉移動する（◆経路表現を伴う）：（場所に）到着する，至る，行く〖into, to〗，（場所から）出て行く，離れる〖out of, off, from〗，（場所を）通り抜ける〖through〗，（場所を）乗り［飛び］越える〖over〗；［＋機能類似］〈人・物事が〉（ある段階に）移動する，達する，進展する

—*DELP*（s.v. get, *v.*, 1－a .）（下線筆者）

↘も作用することで総和以上の意味が生成される」とする経験的立場が求められるとも考えられ得る。詳しくは，上野・森山（2007）参照。

(4) *DELP* は「一言で述べれば，個々の多義語に中心義を定め，そこから意義展開パタンに基づいて意義展開を跡づけ，もって意味ネットワークの全体を記述する」（*DELP*（まえがき））という方法論に則って編纂され，「メタファーなどの意義展開パタンで多義語を包括的に記述した，初めての辞典」と謳われていることから，先行研究の一つとして扱うに値すると考え，論考を進めた。

このように先行研究が乏しい状況下，上野（1998）では，示唆に富む論考が展開されている。そこでは，［get off of NP］自体は観察対象ではないものの，［from PP］が非構造的に捉えられる場合の認知メカニズムを明らかにすることが試みられており，英語母語話者の次元認識に光を当てながら豊富な事例分析がなされている。紙面の都合上，本事案に関係づけられ得る箇所のみ，以下⑵として抜粋する。

⑵　英語の単一前置詞の多くは場所表示語である。これらの前置詞が出発点表示前置詞 from に後置して「from＋前置詞」の形で現れることがよくある。例えば 'from around the corner'（角を曲がったところから），'from between the gateposts'（門柱の間から），'from down the street'（通りを下った所から）等である。しかし，すべての場所前置詞が同じような振る舞いをするわけではない。…

⒜　*from at ～

⑴　*They began to walk *from* at the tree.

もし⑴が正文なら奇妙なものの考え方をしなければならなくなる。すなわち，'from a space/place at the tree' と同意だから，現実にはある容積をもつ木を抽象化し，一点として表した 'at the tree' にまた別の一点である出発点を重ね合わそうとしているのと同じことになってしまう。… 'at' は「一点を示す唯一の静止場所」前置詞であるから，考え方によっては，'from' が 'at' を内包すると言ってもよい。…

⒟　*from in ～

'*from in NP' が非構造的であるのは事実だが，次の諸例

⑹　John walked *from inside* the room.

⑺　John wllked *from out of* the room.

⑻　John walked *from within* the room.

⑼　*John walked *from in* the room.

を比較した時，⑹―⑼ではいずれも NP が 'the room' という三次元場所であるにも拘らず，なぜ⑼の '*from in' のみ排除されるのか，という素朴な疑問が生じるのではないか。…つまり 'inside', 'within' は「内（うち）と外（そと）とを分ける境界線の内側」を表し，… 'inside / within the room' では，たまたま 'the room' という，それだけで三次元の場所空間を表す名詞句が生じていたから理解しにくいだけで，この場合も同様に，「部屋の内と外とを分ける境界線（壁，ドアなど）の内側」に言及したものと考えなければならない。…このように，'from＋前置詞＋NP' の構造に生じうる前置詞が，すべて一次元表示，二次元表示のものに限られるとすれば，'*from in NP' が非構造的である理由は，偏に 'in' 三次元表示の前置詞であることに見出されねばならない。… 'from＋in＋NP' は，次元の点から分析すれば「一次元（from）＋三次元（in）＋NP」となり，三次元という内部空間をいきなり一次元に置き換えるという，いわばその中間の二次元を飛び越した急激な次元の変化をさせていることに等しい。…さらなる証拠として，例えば「彼は部屋の中から門のそばの樫の木まで歩いた」を表現する時，

⒇　*He walked *from in* the room to the oak tree in the gargen.

㉓　He walked from out of the room to the oak tree in the garden.

㉓が正文であるのは，'out of' を用いて「内部から外部」へ一旦移動の実体を出させることによって，外部の一点に位置させ，そ

れからその一点を出発点にするという，いわゆる 'to walk out of the room' implies 'to be at a space/place out of the room' という意味含意規則を緩衝地点創造のために有効に働かせていることが理由となっていると考えられる。

以上述べてきた要旨をまとめてみると

㉔	*from	＋	in NP
	一次元		三次元
㉕	from	＋	out of NP
	一次元		二次元
㉖	from	＋	inside/within NP
	一次元		二次元

となる。繰り返しになるが，from に関する異次元表示の組み合わせは，㉕の図に示すように，

㉕

互いに隣り合わせている次元どうしの共起はよいが（㉔ｂ，ｃ），他次元をスキップすることは許されないということである（㉔ａ）。

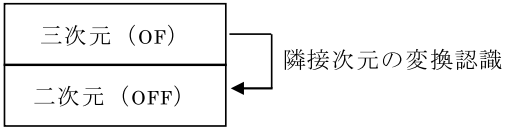
―上野（1998: 1-6）（下線筆者）[5]

⑸　同様の議論として［*from on NP］及び［*from through NP］がなぜ非構造的かについて詳しくは上野（1998: 8-22）参照。なお，本旨とは直接的な関係を持たないことから別稿にて改めて議論したいが，上野（1998）の知見には疑問を呈さざるを得ない箇所も散見される。たとえば，本論第二章⑵におい↗

上記では，［from PP］が構造化されるための制約条件として隣接次元の変換認識が挙げられており，他次元をスキップする変換違反がそれを非構造化せしめる認知のメカニズムであることが詳細に観察されている。

ここで，［get off of NP］における次元認識を同定するために語用論的関数（$y=f(x)$）を用いてみよう。同論理を FUNCTION として設定した場合，出発点概念表示ではないものの，その変項へ off, of を代入することによって下記⑶の定項が導き出される⑹。

⑶



↘ては from を「一次元」表示前置詞として扱われているものの，「出発点」という概念を中核に据えている特性を鑑みる限り，Quirk et al.（1985: 674）でも指摘されている「零次元」表示がその実像に値するのではないかと考えられる。もしそうであるならば，自然な形態として容認される［from within NP］も「from（零次元表示）＋ within（二次元表示）」として隣接次元の変換認識に違反することになる。恐らく，from が表示する「出発点」概念を「一次元」として扱っている背景には，（たとえ言語化されていなくとも）“from NP_1 － to NP_2”が一対のペアとして軌道のスキーマを形成しており（cf. 上野（1995: 29-30）），いずれかだけが言語化される場合であっても図地分化の反転を引き起こしているに過ぎないと捉えたからではないかと推測される。ただ，もしそうであった場合，本論第二章⑵における「考え方によっては，'from' が 'at' を内包すると言ってもよい」とする論理との整合性を保つことができない。

⑹　ここでの of を三次元概念表示前置詞としたのは，言語の経済性による生産的共起関係が挙げられる。史的視座に基づくと，現代英語 of の概念は主に強形と弱形のいずれかから派生していることは広く知られた事実である。もし［get off of NP］の of が前者の概念と等価であるとすると，必然的に余剰な共起関係を生むことになる。詳しくは本論にて後述。

上出⑵の論理に基づけば，［get off of NP］は「NP が指示する空間『内部から外部』へ一旦移動の実体を出させることによって，外部の一点に位置させ，そこから『分離（OFF）』する」という事象を表示するということになり，次元変換認識に違反しない。また，［*from at NP］の違反理由とは異なり，off の概念が（たとえ意味論的源流が等しくとも語彙相の相違がまったく認められない同一種の概念として）of のそれを包含し得ない。しかしながら，この論理が成立するためには，ここでの of の概念が，以下⑷に記されるような out of のそれと等価であることが前提となる[7]。

⑷　元來 out of は，of の強調形であったので，この語の用法，分離（cf. OF［→§2］），期限（cf. OF［→§3］），原因（OF［→§4］），材料（OF［→§5］），部分（OF［→§9］）と of の用法と一致しているところが多い。

―小西（1955: 67-68）

確かに，次の⑸―⑹に見られる「部分」と呼ばれる意味用法などにはその概念が生きているものの，［get off of NP］が表す事象は［*get off out of NP］では復元されず，再現性が担保されない。この点，第一章⑷を下記⑺として，of を out of に置き換えることができない事実からも明らかである[8]。

⑸　of は分離の意より部分や分量をあらわすようになった。たとえば one *of* four は「四つの中から一つを分離する」（one（away）

⑺　英語前置詞 of が多義性を生じる意味変化のプロセスについて詳しくは、森山智浩・髙橋・森山オアナ他（2010: 280-309）参照。

⑻　本論第二章（6 b）における of の概念についてさらに詳しくは，森山智浩・髙橋・森山オアナ他（2010: 284）参照。

from four）の意であったが，今日では「四つの中から一つ」（one out of four）という部分観念をあらわす。

―小西（1955: 20）

⑹　a．Merlin: Ladies and gentlemen, my name is Merlin.　You are about to embark on what is probably the most dangerous job interview in the world.　One *of* you, and only one *of* you, will become the next Lancelot.

―映画 *Kingsman: The Secret Service*（2014）（イタリック体筆者）

b．Hoke: Well, that's mighty nice *of* you！　I sure appreciate this.　Thank you！

―映画 *Driving Miss Daisy*（1989）（イタリック体筆者）

⑺　Rory: *Miss Patty's punch is used to clean tar *off out of construction sites.*

Paris: *So let it clean the tar *off out of our souls.*

他方，たとえ［get off a space［place］of NP］という語彙意味概念構造に相当していたとしても，それは単に［get off NP］と表現すれば良いだけであって，言語の経済性に反する⑼。この違反制約の色彩がより顕著になるのは NP が非場所名詞句を指示する事例である。たとえば，次の⑻―⑼が示す事象はそれぞれ(8′)―(9′)として表し得ず，LM それ自体を「場所／空間」と等価の概念化で捉えることは当然能わない。したがって，

⑼　そもそも，［get off a space of NP］自体は不自然な形態であり，分離移動事象を遂行するためにわざわざ NP 指示物の空間性を前景化させなければならない必然性が問われることもさることながら，これを成立させるには“a space of NP”の指示物における何かしらの「面（もしくは線）」を聞き手（もしくは読み手）に喚起させる文脈上の前提が必要となる。

［get off a space［place］of NP］という語彙意味概念構造では［get off of NP］を生成する意味論的スキーマとしてその一般化を図ることができない。

⑻ Hoyt: Yeah. I *got off of* work late, and I should have.
—TV シリーズ *True Blood,* Episode:“Hitting the Ground”（2010）
（イタリック体筆者）

（8′） *I *got off*［a space / place］*of* work late, and I should have.

⑼ Morgan: Hey, how about we *get off of* mothers, all right? I just *got off of* yours!
—映画 *Good Will Hunting*（1997）（イタリック体筆者）

（9′） *Hey, how about we *get off*［a space / place］*of* mothers, all right? I just *got off*［a space / place］*of* yours!

また，仮に［a space / place］の場所属性志向名詞句の省略と再現による整合性を視野に入れず，［get NP_1 off of NP_2］という他動詞用法を意味論的深層構造とした生成プロセスが本来的に存在していると想定したとしても，本事案の解決には至らない。

⑽ Martin: Ah! For the love of Lucas, *get it off of* me!
—TV シリーズ *Cartoon Monsoon,* Episode:“Oh, Shoot!: Director's Cut”（2003）（イタリック体筆者）

⑾ Dr. Frasier Crane: Well, there's *this woman* I can't seem to *get off of* my mind. A woman with a boyfriend.
—TV シリーズ *Frasier,* Episode:“Miss Right Now”（2004）
（イタリック体筆者）

上記⑽―⑾で言えば，NP_1 はあくまでも対格（ACCUSATIVE CASE）由来名詞句であり，通常，“*get off it of me,”“*I can't seem to get off this woman of my mind”といった off の与格名詞句を設定する形態は依然として容認されない⑽。それ故，この視座でも，（[get off of NP］は格付与の問題で非標準形態であるにも拘らず）off と of とが共起している現象に妥当な概念的理由を与えることができない⑾。繰り返しとなるが，自動詞 get を用いた［get off of NP］における被移動物はあくまでも主格名詞句（もしくはその意味論的深層構造が後述する［get（oneself）off of NP］とする場合は再帰代名詞句）の指示物であり，off の与格名詞句が省略されていると捉えてそれを復元するに足る事物の一般化は想定し得ない。

したがって，次元認識，格付与，言語の経済性のいずれの視座からも［get off of NP］の形態が認められない一方で，［米略式］であるにせよ，なぜこれほどまで広く受け入れられ得る表現であるかが次の議論の的となるであろう。換言すれば，［from inside［out of, outside］NP］といった表現と同等の容認的地位が与えられていないにも拘らず，そうした非標準形態が広く運用されるには，それ相応の何らかの理由が存在していると考えざるを得ない。

⑽　前者が容認されない理由については「接語化（cliticization）」の現象も関わっている。しかしながら，このことも NP_1 が「対格由来名詞句」であることを示している証左となる。同現象について詳しくは，上野・森山・福森・李（2006: 970-973）参照。

⑾　厳密には“preposition-accusative noun phrase”とでも表現すべきであろうが，紙面の都合上，同様の名詞句はすべて「対格名詞句」として表記する。「与格名詞句（preposition-dative noun phrase)」についても同様。

3．［Get off of NP］の概念

3.1．構成性の原理に基づく各構成語の概念

たとえイディオムと呼ばれることがあれ，如何なる連語表現もその意を表示するに至るには各構成語の存在が必要条件になると考え，本節では，［get off of NP］における各構成語の概念を鳥瞰する。

3.1.1．移動動詞 get の概念

以下⑴に見られるように，英語動詞 get の中核概念は「把握行為」に関わるとする共時的視座が散見される。

⑴ 0 中心義 〈物・人を〉手に取る（◆物・人を手にし，自分の身体領域に取り込む）：手に入れる，受け取る，つかまえる，（…から）もらう〖from〗—They got a tiger by the tail. / The police finally got him. / Harry got the biggest fish.（◆釣り）

—*DELP*（s.v. get, *v.*, 0.）（下線筆者）

また，次の⑵に記されるように，この知見は史的視座のそれとも矛盾しない⑿。

⑿ 時に「認知言語学研究に歴史的観点は必要ない」とする声を耳にする。しかしながら，言葉は人間の社会文化・文明の発展・変化と共に発達してきたことから，そこに光を当てることは「如何にして外界と関わり合ってきたか」という人間の思考の進化・変化の過程を明らかにすることに他ならない。したがって，現象学（及び情報学）の論拠も踏まえながら，認知言語学（特に認知意味論）の本質があくまでも以下［1］であるとするならば，極めて物理的な事象から抽出されるプリミティブな認識を多様なものに適用してきた思考様式の一端を明らかにする上で「歴史的観点」は欠かすことができないと考えられる↗

⑵　The Oar. root **ghed, *ghod* 'to seize', 'take hold of', is found also in L.

—*OED*（s.v. get, *v.*）（下線筆者）

そして，［get off of NP］における get は，上記の中核概念から移動表示へと変貌した派生義としての意味用法に位置づけられる。下記⑶—⑷がその詳細である。

⑶　メト［原因で結果◀１］**〈人・物が〉移動する**（◆経路表現を伴う）：（場所に）到着する，至る，行く〖into, to〗，（場所から）出て行く，離れる〖out of, off, from〗，（場所を）通り抜ける〖through〗，（場所を）乗り［飛び］越える〖over〗；［＋機能類似］〈人・物事が〉（ある段階に）移動する，達する，進展する

—*DELP*（s.v. get, *v.*, 1－a .）

⑷　一見 reach や arrive at と同じように到達行為のみを示すように思われる 'get to' も，実は 'get from X to Y' の出発点表示の 'from X' が削除された構造で，get は move の意（*Longman Dictionary of Contemporary English,* s.v. get 9）である。

—上野（1995: 29）

↘（詳しくは森山（2008b）を参照）。

［1］メタファー論とカテゴリー論の二つを主幹とし，身体活動，知覚器官，さらには社会・文化環境との相互作用を通して得られた「人間の本性の産物（products of human nature）」（cf. Lakoff and Johnson（1980: 118））を脳内活動の結果事象である言語表現から見つめる認知科学領域研究

ただし，前者では「原因で結果」，すなわち「原因：物・人を手に取って移動させる → 結果：人・物が移動する」とするメトニミーを通した指示関係によってその意味変化が生じたとされているものの，同概念化において他動詞が自動詞化するプロセス，及び，その再現性については触れられていない。他方，後者は，移動動詞として位置づけられる get の意味論，及び，統語論上の特徴に光を当てたものであるが，これだけでは同じ移動動詞としての move との概念的差異が明らかにならない。

この点，上野・森山・福森・李（2006）では，再帰代名詞句の削除がその変遷過程に存在しているとする仮説が唱えられている。本事案に該当する記述のみ，以下⑸として抜粋する。

⑸　get to A は get（from B）to A の（from B）が省略された形。ここでの get は移動動詞：

例：I *got*（myself from Osaka）*to* Tokyo.

（私は自身をつかんで（got）大阪から東京に到達させた（to）→自身を大阪から東京まで持って行った）

→I *got*（from Osaka）*to* Tokyo.（私は［大阪から移動して］東京に着いた）

→I *got to* Tokyo.（私は東京に着いた）

したがって，ここでの get も「（持つ＋移動させる）→（労力を費やして）持って行く」のイメージを持つことから，単に go to A と言うのに比べて get to A は「到着に困難を伴う」ことをしばしば暗示する。

―上野・森山・福森・李（2006: 552）（一部変更筆者）

「自身をつかんで」とする記述自体は幾分不自然ではあるものの，ここでは，或る到達点への移動行為を遂行する上で，主格名詞句である TR の「意思」が対格名詞句の指示する「自身の身体」を操作する認識が言語化されなければならないほどの「状況の特定化」が生じていることに言及されている[13]。事実，このような位置・状態変化事象の概念化について，異言語間にまたがって並行する現象からもその存在が改めて確認される。

⑹　a．将来への不安を抱える中，前向きな方向に自身を持っていくことができなかった。

　　b．あえてその過酷な状況に自身を据えることが重要だ。

その結果，「労力を費やす」というニュアンスがしばしば発生するという点についても，下記⑺に示される語用論的見解と意を異にしない[14]。

⑺　類義 go と get

go は動き全体について，get は動きの終点である「到着点」に関心がある．get は到着に困難を伴うことをしばしば暗示する。

—*WEJD*（s.v. get, *intra.*, 1）（下線筆者）

したがって，［get off of NP］が示す“leave a place”や“tell someone to stop touching something or someone”といった意は，たとえば［go off of NP］や［move off of NP］などの形態それ自体では表し難いことに

⒀　再帰代名詞句が指示する事物の実像について詳しくは，福森（2011a），福森（2011b）参照。

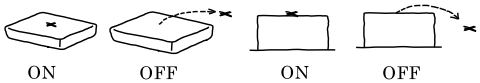
⒁　いわゆる「使役動詞（causative verbs）」と呼ばれる get の意味用法についても，移動概念を基にした同ニュアンスの発生が並行して観察される。詳しくは，上野・森山・福森・李（2006: 553）参照。

なる。言葉を換えれば，TR が LM から分離する事象表示に［get off of NP］の形態を用いるには，通常，（TR の意思に反する事などの事態も含めて）それ相応の労力・努力を要するほどの状況がプロトタイプ的前提（PROTOTYPICAL PRESUPPOSITION）として存在していることが必要条件になっているとも言える。この存在のさらなる検討については 3．2 に論を譲る。

3．1．2．前置詞 off, of 各々の概念

まず，off の概念について観察してみよう。以下⑴に記されるように，その中核には「分離」の概念が据えられている。次の⑵―⑶がその実例である。

⑴ As a word meaning place or movement, usually *off* means the opposite of *on*:



―*AEGU*（s.v. off, *prep.*）

⑵ Count Duckula: Oh, well, that's all right- it *fell off the clothesline* ?

―TV シリーズ *Count Duckula,* Episode: “In Arctic Circles”（1989）（イタリック体筆者）

⑶ Clouseau: I know I *fell off the sofa,* Madame. There's no need to tell me !

―映画 *A Shot in the Dark*（1964）（イタリック体筆者）

上記⑵―⑶が生じるには，各々，“it was *on* the lothesline,”“I sat［lay］*on* the sofa”といった事象がその前提として存在していなければならず，off は on の対義をなし，典型的には「一次元：線」，「二次元：面」を接触

対象とした（そこからの）分離事象を表示する力を持つ[15]。

次に，of の概念に目を移してみよう。下記⑷に示されるように，通時的視座からは，現代英語前置詞 of が呈する多義性の源流が強形，弱形いずれかの概念に遡るとされる。

⑷　Of は off と二重語（Doublet）で OE の æf と of との２形にさかのぼる。のちに æf がすたれて，of が残り，これが更に強形と弱形との２形を生んだ。しかし綴りは大体 ME の終りごろまで，どちらも of と書かれていた。ところが14世紀ごろから徐々に強

⒂　ここで「典型的」とした理由は，文字通りには一次元・二次元の事物を指示していないように感じられるかもしれない名詞句が off に後続する場合も存在していることを考慮してのことによる。以下［１］がその実例である。

［１］Dr. Phibes: No. Dick Baxer died in the ocean. Remember last October those three kids that went diving for that old boat *off the point*?

—映画 *The Fog*（1980）（イタリック体筆者）

確かに，「点」は「零」次元で捉えられることは言を俟たず，よって，次の［２］では，零次元表示前置詞 at がその姿を現している。

［２］Larry Summers: Please, arrive *at the point.*

—映画 *The Social Network*（2010）（イタリック体筆者）

しかしながら，それはあくまでも他次元との対照によって位置づけられるものであり，（そのような対照関係を考慮せずに）「点」それ自体を如何に概念化するかは問題の本質が異なる。つまり，上記［１］であれば，たとえ極小であったとしても「接着点」としての「面積」を持つ対象として point の指示物が概念化されている。同様のことは下記［３］にも当てはまり，ここでは「存在のメタファー」（ONTOLOGICAL METAPHOR）を通して the point of view の指示物が三次元空間内部を持つものとして構造化されている。

［３］Guy Johnson: Now litern, stupid. I've committed a few crimes here and there, but I'm no criminal.

Edwina Corday: It's all *in the point of view,* isn't it?

—映画 *It's a Wonderful World*（1939）（イタリック体筆者）

認知言語学的視座から見た次元認識についてさらに詳しくは，森山智浩・髙橋・森山オアナ（2010: 110–146）参照。

形の of は off と綴られ，主として副詞に用いられるようになった。かくして現在の of と off との 2 形が出來たわけである。

―小西（1955: 1）

なお，「14世紀ごろから徐々に強形の of は off と綴られ」とされているものの，強形の形のままで off の概念が表される事例も少ないながら現代英語に存在している。以下⑸―⑺がその実例である[16]。

⑸ Mitchell: Ah. . . Whispering Pines. It's an artists' colony 200 miles north *of* Santa Fe.

―映画 *Twins*（1988）（イタリック体筆者）

⑹ Imp: None. I am loaning the sword to you free *of* charge or favor.

―映画 *VAmL*（2009）（イタリック体筆者）

⑺ John: And what is this independence *of* yours, except the private grievance of Massachusetts ?

―映画 *1776*（1972）（イタリック体筆者）

3．2．総和としての概念

3．1 で観察された各構成語の概念を基に，その総和としての［get off of NP］の実像を検討する。

まず，3．1．1 では，構成語 get は，中核とする「把握」行為表示から「対格名詞句（再帰代名詞）指示物の移動」行為表示へと意味変化を起こし，そのプロトタイプ的遂行には，それ相応の「労力・努力」が求められ

⒃ 本論 3．1．2 ⑸―⑺で見られた意味用法を持つ of の発生条件について詳しくは，小西（1955: 5-7）参照。

る概念化を観察した。それ故，この遂行が試みられる典型条件として，被移動物である TR が LM から「引き離し難い［＋HARD TO DETACH］」という前提事象が必然的に求められることになる。たとえば，以下⑴―⑵にも同様の認識が反映されていることが確認される。

⑴　Juliet Burke: ［*to Sawyer*］ I've been trying to *get off of this island* for more than three years, and now I've got my chance.　I'm going to leave.

―TV シリーズ *Lost,* Episode: “LaFleur”（2009）

（イタリック体筆者）

⑵　Michael: I gotta *get off of these drugs.*

Huey: Drugs？　Oh, bad news, Michael！

―TV シリーズ *Cartoon All-Stars to the Rescue*（1990）

（イタリック体筆者）

上記⑴―⑵では各々，［TR ON this island］，［TR ON these drugs］という概念で捉えられ得る，「密着性」とも言うべき「接触［IN CONTACT WITH］」関係がその前提となっている。この「引き離すために相応の労力・努力を要する」前提が存在するからこそ，３．１．２で観察した off の「分離」概念がより一層その輝きを放つことになる。

しかしながら，このままでは［get off NP］との概念的差異が明らかとならない。やはり，［get off of NP］の実像を見つめるには構成語 of の存在意義についても光を当てる必要があろう。

第一章⑴―⑶で観察したように，［off of NP］の形態は「非標準」として位置づけられ，その使用を戒める記載も確認された。通時的視座に立脚しても同様で，［off of NP］は16世紀にまで遡る古い形態であるものの，

「冗語・冗長」的であることがその標準形態運用の存続を容認しない淘汰理由とされている[17]。次の⑶がその詳細である。

⑶ The phrasal preposition OFF OF is old in English, going back to the 16th century. Although usage guides reject it as redundant, recommending OFF without OF, the phrase is widespread in speech, including that of the educated: *Let's watch as the presidential candidates come off of the rostrum and down into the audience.* OFF OF is rare in edited writing except to give the flavor of speech.

—*Dictionary.com*（s.v. off, usage note）（アクセス：2019年３月19日）

この「冗語・冗長」的とする見解について，３.１.２⑷（以下⑷として再掲載）で確認したように，同一の源流を有する off と of とが共起することで「余剰さ」を生じさせるとする史的事実からも合点がいく。

⑷ Of は off と二重語（Doublet）で OE の æf と of との２形にさかのぼる。のちに æf がすたれて，of が残り，これが更に強形と弱形との２形を生んだ。しかし綴りは大体 ME の終りごろまで，どちらも of と書かれていた。ところが14世紀ごろから徐々に強形の of は off と綴られ，主として副詞に用いられるようになった。

⒄ *OED* では，以下［１］に示されるように，1875年時点までの使用例が掲載されている。

［１］In all senses, off may be followed by *from*; formerly, and still *dial.* by *of*.
. . .1875 P. BROOKS *New Starts in Life* viii. 129 If you could have filled his pockets with gold, and feasted his hunger off of silver dishes.

—*OED*（s.v. off, I-7）（一部省略・下線筆者）

かくして現在の of と off との２形が出來たわけである。

―小西（1955: 1）

その一方で，第二章で議論したように，次元認識，格付与，言語の経済性のいずれの視座からも［get off of NP］の形態が認められない中，［from inside［out of, outside］NP］といった表現と同等の容認的地位が与えられていない非標準形態が［米略式］としてでも広く運用されるには，それ相応の理由が存在していると考えざるを得ない。

こうした堂々巡りの議論の中，その連鎖を断ち切る鍵となり得るのが，下記⑸に見られるような［off from NP］の存在である。

⑸　Hercule Poirot: Do you know that the priest, when he is buried, he is always facing his parishoners？ Oui. Because when the Day of Judgment, it comes, and the dead, they all arise, he can greet them, and lead them through the Gates of Paradise. Tis a beautiful idea.

Rosaleen: He shan't be leading me.

Hercule Poirot: You must not say that, ma chere. Despair is a sin.

Rosaleen: I'm *cut off from the mercy of God.*

Hercule Poirot: No. No one is *cut off from the mercy of God. . .* ever.

―TV シリーズ *Poirot,* Episode:“Taken at the Flood”（2006）

（イタリック体筆者）

以下⑹に記されるように，そもそも［off of NP］は［off from］と同義の

形態として位置づけられることが通常である。

⑹　Off of: of は from であるから off from と同じ結合で意味も同じである。

DUKE OF SUFFOLK: How camest thou so？　SIMPCOX: A fall *off of* a tree, －Sh., *2 Hen. VI* Ⅱ. i. 96（サッフォーク公：どうしてそうなったのか，シンプコックス：木から落ちました）［OED 初出］

―小西（1955: 46）

しかしながら，次の（７ａ-ｂ）に見られる認知言語学的視座に立脚するとその様相は一変する。なぜなら，形態という容器が異なることはその中身となる意味概念も自ずと異なるとする立場をとるからである。ONE FORM, ONE MEANING（cf. Bolinger（1977））の視座からも同様である。

⑺　ａ．A far more subtle case of how a metaphorical concept can hide an aspect of our experience can be seen in what Michael Reddy has called the “conduit metaphor.” Reddy observes that our language about language is structured roughly by the following complex metaphor:

IDEAS（OR MEANINGS）ARE OBJECTS.

LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS.

COMMUNICATION IS SEEING.

The speaker puts ideas（objects）into words（containers）and sends them（along a conduit）to a hearer who takes the idea/objects out of the word/containers.　Reddy documents this with more than a hundred types of expressions

in English, which he estimates account for at least 70 percent of the expressions we use for talking about language.

—Lakoff and Johnson（1980: 10–11）（イタリック体筆者）

b．For example, the CONDUIT metaphor defines a spatial relationship between form and content: LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS, and their meanings are the *content* of those containers. When we see actual containers that are small, we expect their contents to be small. When we see actual containers that are large, we normally expect their contents to be large. Applying this to the CONDUIT metaphor, we get the expectation:

MORE OF FORM IS MORE OF CONTENT.

—Lakoff and Johnson（1980: 128）（イタリック体筆者）

［Off of NP ⇔ off from NP］の対立軸から［get off of NP］の概念を明らかにするために，ここで同時に見据えておかなければならないことは，［out of NP ⇔ out from NP］のそれとの並行性についてである。

第二章⑵で観察されたように，out of の概念は「三次元空間内部から外部への移動」であり，その起源は同章⑷で記されていた「of の強調形」に遡る。それ故，下記⑻に見られる「次元の差」が出発点概念表示前置詞 from との第一義的な相違となる。

⑻　この語の底に流れる原義は，Out *of* the flying pan into the fire（一難去ってまた一難）に見られるように，into に反対の意味，即ち單に from と違って from within（... の中から外へ）の義である。そのほか主として状態をあらわす動詞に結びついて in,

within に対照する場合もある。

―小西（1955: 68）

そして，これらの次元の差を基にした派生概念の相違に関して，その解明に寄与する知見が以下⑼である。

⑼　更に，この「経由」概念を活用すれば，'be made from' と 'be made of'，'die from' と 'die of' といった「熟語」と呼ばれる連語表現について，なぜ前置詞 of, from との共起関係で各々異なる概念が生じるのか，その意味論的メカニズムが明らかになり，語用上の誤解を生じさせない学習・指導を行うことが可能となります。

まず，次例⑼に注目してみましょう：

⑼　Bill went *from* San Francisco *to* New York.

⑼はサン・フランシスコからニューヨークに至るビルの物理的直線移動を表しています。しかしながら，［from X to Y］という表現には，以下⑽のように，出発点と到達点の間にその直線を一休みさせるような点，いわば「経由点」のようなものを付加して捉えることができます：

⑽　Bill went from San Francisco to New York

$$\left\{\begin{array}{c}\textit{via}\\ \textit{by way of}\end{array}\right\}\text{St. Louis.}$$

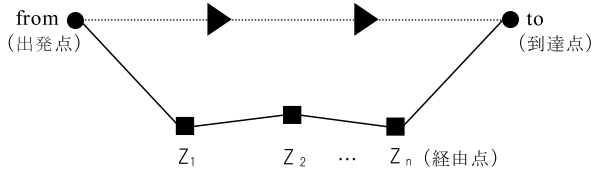
この経由点は一つに限られることはなく，下記⑾のように複数個存在しても構いません：

⑾　Bill went from San Francisco to New York

$$\left\{\begin{array}{c}\textit{via}\\ \textit{by way of}\end{array}\right\}\text{St. Louis and Dallas.}$$

このような移動行為の出発点・到達点・経由点は次の⑿のようなイメージ・スキーマ（image-schema）（＝人間が身体的・知覚的に繰り返し経験したことを抽象的レベルで構造化したもの）と呼ばれる概念図で描かれます：

⑿



…したがって，上出⒀（以下⒄として再掲）には，

⒄　Wine *is made from* grapes.

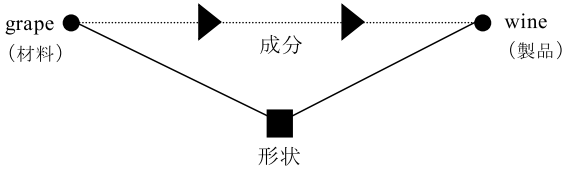
次の概念上の図式が成り立ち，

⒅　A be made from B：

「A（製品）≠B（材料）」→製造後に材料が何であるかが一目瞭然でない

材料であるぶどうからワインが作られる時，形状が変化する事象が表されます。具体的に言えば，製品（ワイン）は「成分」と「形状」からなり，変化するのは形状のみで成分には何ら変化はありません。つまり，ぶどうという材料を変化させることによってワインという製品に到達させる行為を物理的移動行為（＝或る物体を移動させることによって別の位置に到達させる行為）に見立てれば，それだけ製品と材料とが概念的に「遠い」わけです：

⒆　［A（＝製品）be made from B（＝材料）］の捉え方



したがって，ぶどうがワインに変わる時，成分は直線的に移動しますが，形状は変化という過程を「経由」しての移動，すなわち概念的に「遠さ」につながる寄り道をして移動すると捉えられます。そして，この「遠さ（＝間接性）」が言語化される時に from が用いられることになるのです。

それに対し，'be made of' の of は通時的（＝歴史的）観点から見れば off と同源です：

…off の中核的イメージは「（線／面からの）分離」ですから，［make A of B］は「Bから分離させて（of）Aを造る（make）」ことを表します。つまり，その受け身形である［A be made of B］の形は「A＝B」（＝直接的）という概念上の図式を示しているのです：

㉒　A be made of B：「A＝B」（＝直接的）という概念上の図式を示す

したがって，次の㉓は，

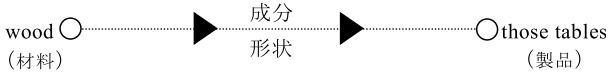
㉓　Those tables *are made of* wood.

以下の概念上の図式が成り立ち，

㉔　A be made of B：
「A（製品）＝B（材料）」→製造後に材料が何であるかが一目瞭然

材料である木から机が作られる時，成分だけでなく形状も変化しない事象が表されます。つまり，それだけ製品と材料とが概念的に「近い」わけです：

㉕　［A（＝製品）be made of B（＝材料）］の捉え方



つまり，寄り道（via / by the way of）がない，という「近さ（＝直接性）」が言語化される時に of が用いられると言えます。

― 上野・森山・福森・李（2006: 866-870）（一部省略筆者）

上記では，［be made of NP］の of は強形としての off に遡及する事実を鑑み，その与格名詞句指示物からの「分離」認識を通して，［＋NEARNESS; －FARNESS］・［＋DIRECT］の概念素性が抽出される認知プロセスが述べられている。他方，［FROM X TO Y］という移動のスキーマを基に，出発点（＝材料）と到達点（＝製品）とのあいだに経由点を設けることができる認識を逆手に取った認知プロセスが機能し，そこから生じる［－NEARNESS; ＋FARNESS］・［－DIRECT］の概念素性が［be made from NP］に反映されるメカニズムも論考されている。かくして，こうした経由点を挟み込むことができるほど，概念上の出発点と到達点とを結ぶ経路にはそれ相応の「余地」が存在することとなり，第一章⑴で見られた「距離を感じさせる場合には from が好まれる」とする結果事象に至るのである。まさに，この「余地」こそが「一定の隔たり」概念を創出するトリガーとなることが確認されよう。

ここでようやく，［off from NP］との対照を通して［off of NP］の概念が明らかになる。なぜなら，以上の知見を［out of NP ⇔ out from NP］及び［off of NP ⇔ off from NP］の対立軸に適用すると，各々の概念は次の⑽―⑾として捉えられることになるからである。

⑽　中核概念：三次元空間内部から外部への移動

ａ．out of NP:［＋NEARNESS; －FARNESS］

→ NP 指示物の内部から外部への位置変化事象＋移動距離の非焦点化（＝つまり，内部から外部へ移動しさえすれば良い事象の焦点化）

b．out from NP:［－NEARNESS; ＋FARNESS］

→ NP 指示物の内部から外部への位置変化事象＋移動距離の焦点化（＝つまり，外部への位置変化事象の生起だけでなく，その被移動物の存在位置が NP 指示物から一定の距離（心的距離もここに含む）も要する事象の焦点化）

⑾　中核概念：一次元・二次元物からの分離

a．off of NP:［＋NEARNESS; －FARNESS］

→NP 指示物からの分離事象＋移動距離の非焦点化（＝つまり，分離しさえすれば良い事象の焦点化）

b．off from NP:［－NEARNESS; ＋FARNESS］

→NP 指示物からの分離事象＋移動距離の焦点化（＝つまり，分離事象の生起だけでなく，その被分離物の存在位置が NP 指示物から一定の距離（心的距離もここに含む）も要する事象の焦点化）

ただし，仮説（11 a ）には注意を要する。なぜなら，この定義を文字通りに捉えると「それでは［off NP］との概念的相違は何か」という問いに対して依然十分な回答が得られず，結局「of の存在意義」が判然としないからである。その指摘はむしろ妥当であり，第一章⑴―⑶で示されていたように，（略式か否かは別として）語用を等しくする［off of NP］と［of NP］を対照するだけでは各々の概念的な差が明確とならない。そうではなく，上述したように，あくまでも［off from NP］との対照を通して位置づけることにより，初めて［off of NP］の実像が浮かび上がる。具体的に言えば，本来，３．１．２⑴で観察した off の特性故，「分離しさえすれば良い事象の焦点化」を行うには of の力を借りる必要はない。つまり，［off NP］は単に分離事象を表示しているだけであって，TR の移動後の存在位

置がLMから一定の隔たりを持っているかどうかは意味表示の射程範囲に含まれておらず，その位置変化後の距離については或る種「無標的（UNMARKED）」であるとも言える。この点でも，第一章⑶が［off of NP］の使用を戒めていたのも合点がいく。ところが，［off from NP］の出現によってその様相が一変する。上記（11ｂ）に記されるように，分離したTRの存在位置がLMから「一定の隔たりがある」とする意義づけとして［off from NP］の形態が誕生したとするならば，「そうではない」，すなわち「TRの分離後の存在位置としてLMから一定の隔たりがあるかどうかは焦点化されず，とにもまずは『分離』する必要性が生じている」とする対義表現形態も求められよう⒅。ここに，［off NP］と語用は等しくとも，あくまでも［off from NP］との対照の中で［－FARNESS］のマーカーとしてofを用いた［off of NP］の形態が求められる必然性が発生するのである。事実，下記⑿―⒀に示されるように，［off of NP］の初出は［off from NP］のそれに連続するかの如く英語史に姿を現しており，通時的視座から見てもその流れに矛盾はない。

⑿　1526 TINDARE *Matt.* viii, 30 A good waye off from them.

―*OED*（s.v. off, I-7）（下線筆者）

⒅「TRの分離後の存在位置としてLMから一定の隔たりがあるかどうかは焦点化されず，とにもまずは『分離』する必要性が生じている」という意味では，本論３.２（10ａ）・（11ａ）における［＋NEARNESS; －FARNESS］の概念素性について，後者の［－FARNESS］に主眼が置かれていると言える。だからこそ，以下［１］に見られるように，そうした分離事象遂行の「即時性」が求められるケースも少なくない。

［１］Wendy: No, you're dead weight！ *Now* get *off of me* before my tits come out of my back！

―映画 *Street Trash*（1987）（イタリック体筆者）

以降，同様の主旨で論を進める。

⒀ 1593 SHAKS. 2 *Hen. VI,* II. i. 96 A fall off of a Tree.

—*OED*（s.v. off, I-7）（下線筆者）

そこで，次に，上出⑽—⑾の仮説が妥当であるかどうか，実際の言語現象を通してその検証を行う。まず，［off from NP］に関して，下記⒁—⒂では「一定の距離；差」を表す副詞句との共起関係が確認される。

⒁ Julie Ann Winslow: Did you ever think you'd like to travel a long way off... as far and as high as the moon... and stay there for good... forever ... and forget all about things down here ?

Wes McQueen: There's been plenty of times I wanted to get away from where I was.

Julie Ann Winslow: That far away ?

Wes McQueen: Yeah, that far.

Julie Ann Winslow: You never talk about yourself. I don't know anything about you at all.

Wes McQueen: There's nothing to tell. Like you said, wanting to get *far off from what you've been.* This is far off.

—映画 *Colorado Territory*（1949）（イタリック体・下線筆者）

⒂ The Doctor: We are not of this race. We are not of this earth. Susan and I are wanderers in the fourth dimension of space and time, cut *off from our own people by distances beyond the reach of your most advanced science.*

—TV シリーズ *Doctor Who,* Episode:“An Unearthly Child”（1963）

（イタリック体・下線筆者）

このような距離感が「時」の名詞句の姿に転じた事例が以下（16ａ-ｂ）である一方,「全体」表示として言語化された事例が次の（17ａ-ｂ）である。

⑯　ａ．Lois Griffin: Let's just agree that we both went a bit too far, hmm？

Glen Quagmire: I might need *two weeks off from this friendship.*

―TV シリーズ *Family Guy,* Episode:“A Lot Going on Upstairs”（2016）

（イタリック体・下線筆者）

ｂ．Himself - Host: And finally, new rule: the next time you hear someone say“You may be cursed to live in interesting times,”punch them in the face.　Because after two years of Trump chaos, that line isn't cute any-more.　In fact, you have my blessing, as your political rabbi. . .

Himself - Host: . . .to take *the rest of the year off from following politics.*

Himself - Host: But. . . not'till next week, because we have one more show.

―TV シリーズ *Real Time with Bill Maher,* Episode:“#16.34”（2018）

（イタリック体・下線筆者）

⑰　ａ．Milos Hrma: I cut myself *off from the past entirely.*　Just like that.

―映画 *Closely Watched Trains*（1966）（イタリック体・下線筆者）

b．Grace: I'm beginning to feel *totally cut off from the world.*

―映画 *The Others*（2001）（イタリック体・下線筆者）

また，たとえ物理的隔たりが少ない場合でもそこに至るまでの困難さ故に「心的距離」が表される事例も存在する。下記⒅がその実例である一方，こうした「心的距離」が抽象的事象に適用された事例が以下⒆である。

⒅ Aqualad:［場面：after Kid Flash runs into a barrier］We're *cut off from the street.*

Kid Flash: Thanks. My head hadn't noticed.

―TV シリーズ *Young Justice*, Episode:“Fireworks”（2010）

（イタリック体・下線筆者）

⒆ Navid Shirazi:［場面：going surfing with Dixon and Liam］

I didn't expect to see you here. Got *a day off from driving Miss Daisy*？

Liam Court: Daisy took a cab. She's got a full afternoon of “purse business.” She knows the rules, man. I deal with her, but not the drugs.

Dixon Wilson: I still can't believe that girl deals, man. It's not even like she needs the money. I swear, I'll never understand rich kids.

Liam Court: Trying to understand rich kids is like trying to understand LeBron James. The more you talk about it, the angrier you get.

―TV シリーズ *90210*, Episode:“Mother Dearest”（2010）

（イタリック体・下線筆者）

したがって，次の（20ａ-ｂ）と同様，前出⑸が表す事象はNP指示物からの「隔たり」が焦点化されている一方，⑵では，そうした（出発点から到達点までの）距離感を生じさせるトリガーとなっていた「経由点」を設けることができる認識プロセスが顕在化しており，同事象表示に［off of NP］の形態は適用し難い。

⑳　ａ．［場面：Vader has reached the hangar bay where his personal Tie Advanced x1 is housed, as alarms continue to wail.　He meets two Imperial pilots heading for the same hangar and addresses them］

Darth Vader: Several fighters have broken *off from the main group.*　Come with me !

―TV シリーズ *Star Wars,* Episode:“A New Hope”（1977）

（イタリック体筆者）

ｂ．Dale 'Barbie' Barbara: Two weeks ago, an invisible dome crashed down on Chester's Mill, cutting us *off from the rest of the world.* Why the dome is here or what mysteries lie ahead, we still don't know.　Every day it tests our limits, bringing out the best and the worst in us.　Some say we'll be stuck here forever, but we will never stop fighting to find a way out.

―TV シリーズ *Under the Dome,* Episode:“Heads Will Roll”（2014）

（イタリック体筆者）

㉑ It has been shown since the 1960s that the infusion of intravenous glucose improves survival of preterm infants. The late second trimester and early third trimester fetus born prematurely, between 22 and 28 weeks, is suddenly cut *off from a rich nutrient supply by way of placental flux, primarily of glucose and amino acids.*

—*US National Library of Medicine National Institutes of Health*

（アクセス：2019年３月21日）（イタリック体筆者）

他方，以上と対照をなす［off of NP］の概念が顕著に現れている事例が，第一章⑷—⑸（以下，それぞれ㉒—㉓として再掲）で取り上げた実例である[19]。

㉒ Rory: Miss Patty's punch is used to clean tar *off of construction*

⒆ 本論３．２㉒に見られる site, soul の両指示物は三次元的事物として概念化され得る実体を持ちつつも，ここでは二次元的事物としての或る側面が前景化（FIGURE）されている。このような図地分化（FIGURE / GROUND SEGREGATION）認識の存在は以下［１］—［２］の次元対立にも現れている。

［１］ａ．Benedick: Think you *in your soul* that Count Claudio hath wronged Hero？

—映画 *Much Ado about Nothing*（1993）（イタリック体筆者）

ｂ．Jeff: You know something, Ray？ You're gonna get yours one day. And I pray to God he has mercy *on your soul,* you son of a bitch！

—映画 *Ray*（2004）（イタリック体筆者）

［２］ａ．Malcolm: You're *in the wrong ambush site*！ Cease fire！ You're *in the wrong ambush site*！

—映画 *Heartbreak Ridge*（1986）（イタリック体筆者）

ｂ．Dr. Rodney: Probably. It'd be just our luck we've stumbled *on one of their nuclear testing sites.*

—TV シリーズ *Stargate: Atlantis,* Episode: “Phantoms”（2006）（イタリック体筆者）

sites.

Paris: So let it clean the tar *off of our souls.*

―TV シリーズ *Gillmore Girls,* Episode: “That's What You Get, Folks, for Making Whoopie”（2012）（イタリック体筆者）

㉓ Hattie: You let go of me, Dutch Muller !

Dutch Muller: Aw, quit your kiddin'.　You know you love it !

Hattie: Take your hands *off of me* !　I hate the touch of ya !

Dutch Muller: Oh, I suppose you like the touch of that dressed up can of tuna, huh ?

―映画 *Riffraff*（1936）（イタリック体筆者）

まず，前者㉒について，“（the）tar”の指示物が具象物から抽象物へと意味変化を引き起こしているが，それと並行する形で“construction sites”と“our souls”も同様のメタファー関係を築いており，それぞれ「物理的場所」／「抽象的場所」として捉えられる。そして，いずれもが“（the）tar”の指示物を各々の場所の或る側面（場合によっては複数面）からとにも「分離する（OFF）」，すなわち「除去（REMOVAL）」しさえすれば良い事象に焦点が当たっているだけで，その被分離物の除去後の距離や隔たりが問われているわけではない。こうした色彩は後者㉓ではより鮮やかに浮かび上がっている。なぜなら，後続する“hate the touch of ya”によって取りも直さず「手を離して欲しい」とする「接触から非接触」への状態変化認識が増幅されている一方，非接触後の手と手の距離感は話題化されていないからである。実際，下記（24 a - b）では，このような［－ FARNESS］の概念の存在が可視化されており，これまでの論考内容の妥当性を物語っている。

⑵④　a．Smoke billows from the America Cruise Ferries boat as a helicopter flies *near off of San Juan,* Puerto Rico, on Wednesday

—*Mail Online News*（August 18th, 2016）

（アクセス：2019年３月21日）（イタリック体・下線筆者）

b．Schwartz: And by that time even the smaller packers began to have trouble and David Davies who was considered a small packer, that is if you compare him with the big four out of Chicago, David Davies was considering to close the Columbus plant but they had a beautiful building in which they kept their hides which was located *near off of West Mound Street* near Handler's Junk Yard near the Lazarus old warehouse, and that was David Davies' warehouse.

—*Columbus Jewish Historical Society*（アクセス：2019年３月21日）

（イタリック体・下線筆者）

なお，［get off of NP］が距離副詞 far と共起する事例も散見されるが，以下⑵⑤—⑵⑥に見られるように，その多くが否定志向語句と共起していたり中立性（つまり「遠い」ではなく「遠さ」という無標的距離表示））の far を使用していたりするなど，これまでの論旨に不整合性を与えるものではない⑳。

⑳　他方，［near off from］に関して Google サーチを行なったところ，そのヒット数が［far off from］の約6,410,000件に対して，約3,980件と圧倒的に少ない（2019年３月21日現在）。この歴然たる差も［off from NP］が本来的には［＋NEARNESS］の概念を有していないことを示唆していると言えよう。

㉕　Who would have thought that the numbers of female professors and women in higher management of Dutch universities would *not be so far off of Japanese universities*?

—*Researchers in Science for Equality*（アクセス：2019年３月21日）

（イタリック体筆者）

㉖　Are we way off *how far off of our planet* are we relative to where I next charging station ?

—*Daily News*（Febuary 26th, 2019）（アクセス：2019年３月21日）

（イタリック体筆者）

以上，［off of NP ⇔ from of NP］の対立軸も交えて各構成語の概念を詳細に観察してきたが，それらの総和が［get off of NP］の形態に反映されている実体として以下㉗—㉘が表す事象を確認しておく。

㉗　［場面：Lucas runs in to play the first big game for the football team.］

Lucas: I'm ready to go in.　I can run fast.　I can win this game.

Coach: Just *get out of here,* will you ?

Lucas: Look, just give me one chance.　One play.

Coach: *Get out of here,* I said.　*Get off of the field.*

—映画 *Lucas*（1986）（イタリック体筆者）

㉘　Battle Droid: He's around here somewhere.　Hey, *get off of me* !

—TV シリーズ *Star Wars: Clone Wars,* Episode: “Ambush”（2008）

（イタリック体筆者）

まず，㉗について，Lucas が強い意思でもって（アメリカンフットボールの）試合参加を訴えかけていることが確認される。一方，その意思・行為を認めようとしない Coach に対して Lucas は one play だけでも行うチャンスを与えて欲しいと願い出ている場面である。以上の流れの中で，最終的に Coachは“*Get out of here,* I said.　*Get off of the field.*”と発言することとなるが，まず［get out of NP］の形態を用い，その後［get off of NP］のそれが用いられていることが観察される。したがって，前者では here の指示場所を三次元空間化し，その内部から外部への移動が命じられている一方，後者では the field が二次元事物として（Lucas の足の裏が接触している）地面を前景化し，そこからの「分離」が命じられている。いずれも，Lucas の「動こうとしない」もしくは「動きたくない」という意思が前提となっているが故に，その移動を命じるには“get”が相応しい。さらに後者に至っては，the field の指示場所から Lucas（正確には Lucas の足の裏）が「分離」しさえすれば，すなわち，その場所から出た後の行き先などはどうでも良く，とにもそこから即座に出ることだけが命じられているが故に，［off of NP］の概念がその力を発揮することになる。

このような概念化は㉘が表す事象についても同様である。帝国軍の戦闘用ドロイドに対して待ち伏せしていたジェダイ騎士のマスター・ヨーダ（上記㉘内の“he”が指示する人物）が急襲して頭にしがみついたところ，そのドロイドが“Hey, *get off of me* !”と叫んだシーンである。周囲にも同じく銃を持っている数体のドロイドが行動を共にしていたものの，ヨーダを引き離さなければ発砲しても同士討ちになってしまう。このような状況では，しがみつかれたドロイドの頭の表面からとにも「（引き）剥がす」必要があることは言を俟たない。また，ヨーダ自身，「しがみつこう」という意思でもってドロイドを急襲しているが故に，その移動を遂行させるには get が好ましい。ただし，その場ではただただ即座に引き剥がすこと

が肝要であり，（その後，仲間が銃で仕留めることができなかった場合などを想定して）分離後のヨーダが「隔たり」をもってどのような場所に移動するか（もしくは逃げ去るか）にまで焦点が当たっているわけではない。ここに，［get off of NP］の形態が用いられる意義が確認されるのである。

３．３．［Get off of NP］に関わる概念体系

前節での議論を踏まえ，［get off of NP］に関わる概念体系を明らかにするためにまだ解決されていない項目が一つ残ったままとなっている。それは，［out of NP ⇔ out from NP］の対立軸との比較・対照を通した論考についてである。

３．２⑽―⑾（以下，それぞれ⑴―⑵として再掲）では，LM である NP 指示物の次元の違いはあれども，［get off of NP］における各構成語概念の総和の実像を浮き彫りにするために，［out of NP ⇔ out from NP］・［off of NP ⇔ off from NP］の両対立軸間に概念的並行性を求める仮説を立て，後者の妥当性を論考してきた。

⑴　中核概念：三次元空間内部から外部への移動

ａ．out of NP:［＋NEARNESS; －FARNESS］

→ NP 指示物の内部から外部への位置変化事象＋移動距離の非焦点化（＝つまり，内部から外部へ移動しさえすれば良い事象の焦点化）

ｂ．out from NP:［－NEARNESS; ＋FARNESS］

→ NP 指示物の内部から外部への位置変化事象＋移動距離の焦点化（＝つまり，外部への位置変化事象の生起だけでなく，その被移動物の存在位置が NP 指示物から一定の距離（心的距離もここに含む）も要する事象の焦点化）

⑵　中核概念：一次元・二次元物からの分離

a．off of NP:［＋NEARNESS; －FARNESS］

→ NP 指示物からの分離事象＋移動距離の非焦点化（＝つまり，分離しさえすれば良い事象の焦点化）

B．off from NP:［－NEARNESS; ＋FARNESS］

→NP 指示物からの分離事象＋移動距離の焦点化（＝つまり，分離事象の生起だけでなく，その被分離物の存在位置が NP 指示物から一定の距離（心的距離もここに含む）も要する事象の焦点化）

この仮説に基づくと，［out of NP ⇔ out from NP］も［off of NP ⇔ off from NP］と同様の振る舞いを呈するはずである。しかしながら，次の⑶—⑷に示される容認度の差から，一見，その予想は的を外しているかのように感じられるかもしれない[21]。

⑵1　本論 3．3 ⑶—⑷に示されるような容認度の差について，（“how”を含まない形で）Google サーチをかけても，同様の結果が得られるばかりである。以下［1 a-d］がその詳細である（2019年 3 月22日現在）。

［1］ a．［near out of］：約66,700件
b．［far out of］：約2,660,000件
c．［near out from］：7 件
d．［far out from］：約214,000件

この結果を精査する限り，まず［1 c］は通常，容認され難い形態であるとみなし得る。他方，［1 a-b］・［1 d］の中で，［1 a］のみが比較的少ないヒット数になっているのは，本論にて後述する［out of NP］の階層構造に起因すると考えられる。つまり，たとえば［移動動詞＋out of NP］の形態であった場合，その［out of］自体の特性故に，本来 TR の移動は LM の「内部空間から外部空間への位置変化」に焦点が当たるだけで移動後の TR の存在位置が LM から如何なる隔たりがあるかどうかは話題としないという意味では［－FARNESS］の概念素性表示がそのプロトタイプ的語用に近いはずである。ところが，本論 3．3 ⑹に図示される階層性故に，［far out of NP］の形態は「そのプロトタイプ的表示とは異なる」という意味で“far”を明示する必要が↗

⑶　ａ．The Comfort Inn hotel is located *near out of* Braşov, Romania.

　　ｂ．The Comfort Inn hotel is located *a little far out of* Braşov, Romania.

⑷　ａ．?? You must not go *near out from* the shore in the small boat.

　　ｂ．You must not go *too far out from* the shore in the small boat.

なぜなら，［out of NP］は，３.２.⑻の通時的視座に立っても「内部から外部への位置変化」に焦点が当たっているのみであり，同節⑼の共時的視

↘あるのに対し，［near out of NP］は“near”を付加することで幾分冗漫な形態であるとみなされ，上記［１ａ-ｂ］のヒット件数の差が生じていると考えられる。同様のことは［off NP］にも当てはまり，（“how”を含まない形での）Google サーチでは，［far off NP］が約6,940,000件であるのに対し，［near off NP］は約258,000件と大きくヒット数を落としている（2019年３月22日現在）。その意味では，［off of NP］の位置づけは次の［２］―［４］のように捉えることも可能であろう。

［２］［off NP］は［off］自体の特性故に，本来 TR の移動は LM からの「分離」に焦点が当たるだけで移動後の TR の存在位置が LM から如何なる隔たりがあるかは話題とせず，むしろ［－FARNESS］の概念素性表示がそのプロトタイプ的語用に近い。

［３］したがって，本論３.２⑿―⒀に見られたように，本来的には［off NP］が表す事象と区別するために［off from NP］が現れたものの，後者との対照形態が求められた結果，［off of NP］がそこに宛がわれた。

［４］ところが，格付与違反などの問題もさることながら，それでは上記［１］の特性を持つ［off NP］との対比だけでは概念的差異が判然とせず，その使用が戒められることになる。一方，あくまでも［off from NP］との対照関係で，すなわち［－FARNESS］の概念素性表示をより強く表したいが故に，［off of NP］の形態が今なお失われず，広く運用されている。

このような相関関係を簡潔に図示したものが３.３⑹であり，詳しくは本論にて後述する。なお，本論３.３（４ａ）に関して，たとえば“You must not go *even near out from* the shore in the small boat.”とすると容認度は上がるが，この場合，“even near”の言外には「あまつさえ遠い場所には…」とした主旨も含まれることから，本論考内容に何ら影響を与えるものではない。

座に立っても依然［－FARNESS］の概念素性を生むロジックしか当てはまらず，上記（３ｂ）が容認される結果とは矛盾が生じてしまうからである。となると，このようなギャップを埋めていると想定される認知プロセスは「階層性」に拠っていると考えざるを得ない。つまり，上記⑶―⑷の産出された言語事実とこれまでの論理との間にギャップが存在しているように感じさせるのは，［out of NP］の形態が表す概念を「一元的に」眺めてしまっているが故の可能性が高い，ということである。たとえば，そこに移動動詞 get を付加した［get out of NP］の形態で考えてみよう。３.2で議論した［get off NP］のケースと同様，［＋FARNESS］の概念素性を有する［out from NP］の出現により，その対義表現形態が必要となることで［get out of NP ⇔ get out from NP］の対立概念表示を生み出したとするならば，この意味表示こそが「一元的に」見た［get out of NP］の概念であると言える。ところが，上述したように，通時的・共時的視座各々による縦軸・横軸の双方から見ても，この［get out of NP］の形態は「内部から外部への移動・位置変化」が焦点化されるだけであって，本来，その後の TR の存在位置が LM から一定の隔たりがあるかどうかについては意味表示の射程範囲に含まれていない。その意味では，そうした位置変化だけに焦点が当てられている［get out of NP］はむしろ［－FARNESS］の概念素性表示がそのプロトタイプ的語用に近く，それと区別するために［get out from NP］が宛がわれたとも考えられる。然らば，［get off NP－get off of NP / get off from NP］の階層のように，［±FARNESS］の概念素性に左右されない（もしくは制限されない）上位語句の形態が求められよう。ところが，下記⑸に示されるように，［out of］の“out”は「副詞」であることから，［get off NP］の“off”のように前置詞の振る舞いを呈する機能を持たず，［get off NP ⊇ get off of NP］と同等の意味論的論理関係を築こうとしても，［*get out NP ⊇ get out of NP］とすることが能わな

い[22]。

⑸　Out of はもと forth of, out from などと同じように，「副詞＋前置詞」のややゆるい結合関係にあった語である。

―小西（1955: 67）

そうなると，［get off NP－get off from NP / get off of NP］のようにその上下関係を［*get out NP－get out from NP / get out of NP］として構築できず，かたや，その下位区分の層に絞って考えても［－FARNESS］の概念素性だけをより強く表現するために［get out of NP－get out from NP / *get out of of NP］と of を重ねることも能わない。詰まるところ，（たとえ［－FARNESS］の概念素性表示がそのプロトタイプ的語用に近くとも）移動後の TR の存在位置が LM から隔たりがあるかどうかを話題にしないという本来の特性を活かし，その無標の上位語句としても同一形態［get out of NP］を宛った階層を形成していると捉えざるを得ない。これは或る種，同音異義の形態として無標の「上位語句：［[UNMARKED] get out

---

[22]　以下［１］に記されるように，主にアメリカ英語では［out NP］の形態も存在している。

［１］Out が out of の代わりに用いられる場合：現代英語としては，イギリスでは out が out of の代用をなすことはないが，アメリカでは普通 out the door, out the window という場合に，out of と共に口語体でごく普通に使用され，アメリカの語法の一つの特徴となっている。

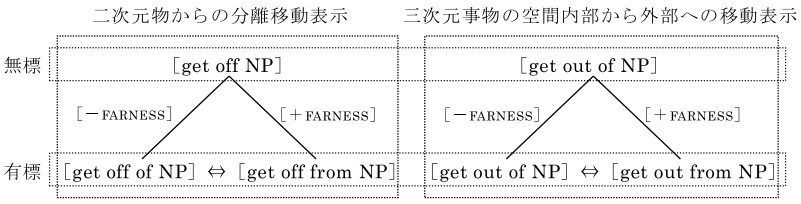
―小西（1955: 72）

しかしながら，本論３.３⑹図のような「無標」性を持つ上位形態として（もしくはそうした階層をなすための基本形態レベルとして）［get out NP］という「非標準形態」が位置づけられることはない。つまり，標準形態が先に存在して初めて非標準形態が生まれるのであって，通常，その逆の流れは語句生成プロセスに関する我々の認知活動に反することは言を俟たない。

of NP］」（＝（３ｂ））と有標の「下位語句：［［MARKED］get out of NP］」（＝（３ａ））という２種類の形態が存在していることに等しい。他方，［get off NP］は off が前置詞機能を持つが故に，このような「二元的」な捉え方を要せず，その下位区分として［＋FARNESS］表示には［get off from NP］の形態が，そして，あくまでもそれとの対照の中で「TR の分離後の存在位置としてLM から一定の隔たりがあるかどうかは焦点化されず，とにもまずは『分離』する必要性が生じている」という意味での［－FARNESS］表示には［get off of NP］の形態が宛がわれるようになったと考えられるのである。

以上の論考から得られた概念体系を以下⑹として簡潔に図示する㉓。

⑹



４．おわりに

かつて Coulmas は著書 *Die Wirtschaft mit der Sprache: Eine sprachsoziologische Studie*（1992）にて，言語の経済性には富によって普及していくパタ

㉓　本論３．３⑹図における「無標」とは，３．２⑽―⑾に関連する箇所ですでに議論したように，「TR の移動後の存在位置が LM から一定の隔たりを持っているかどうかはその意味表示の射程範囲に含まれていない」という定義づけに基づく。また，同図における［－FARNESS］は注釈18の主旨に基づく。

ンと言語それ自体が自律的かつ効率的に変化していくパタンの２種類が存在し，経済の言語的側面と言語の経済的側面とは互いに密接な関係を築いているという主旨を述べた[24]。その是非はともかく，特に後者について，認知意味論の視座からは，少なくとも各表現が本来的に包含している「概念」を無視してその意味変化が突然生じるとする立場を有していない。これはたとえば，近年，日本語で「全然できました」などと表現されるとき，本来否定志向であった「全然」が肯定文でも使われるようになった，とするだけの立場とは意を異にするが如くである。そうではなく，こうした表現にも「本来的な概念が生きている」と考え，「全然（問題なく）できました」といった意味変化のミッシング・リンクを補完してそのプロセスを明らかにしようとする立場と類似している。本稿で論考してきた［get off of NP］についても同様であり，非標準形態であろうともそれが普及している現状を鑑みる限り，そこには何らかの「ロジック」が存在していると捉えることが肝要となろう。そして，先人の叡智を踏まえつつ，各構成語の概念を一つひとつ丁寧にとりあげ，時に社会・文化的フレームなども交えながらそれらの有機的な結びつきを丹念に洗い出すことがその自律的・効率的意味変化のプロセス解明に近づくことができるのではないかと信じて止まない。

最後に，３.３⑴―⑵・⑹の概念体系も念頭に置きつつ，これまでの論考内容のさらなる妥当性を物語る例として以下⑴が表す事象を観察することで本研究の結びとしたい。

⑴　We all know that we have to *get off of fossil fuels.*　And we know that the world is going in that direction.　And we have to do it fast.

---

[24]　言語変化を引き起こす諸要因について詳しくは，森（2014）参照。

―*The biography of Josh Fox*（アクセス：2019年３月22日）
（イタリック体筆者）

上記⑴では，［get off of NP］の形態が用いられており，“fossil fuels”におけるメトニミカルな指示関係を通して「化石燃料（に依った生活）からの分離移動」が強く促されている。裏を返せば，このように表現されるには，我々の日常生活はそうした燃料を用いることとは離れ難いほどの関係を持っていることがその前提となっていなければならず，実際，上記⑴の直前には次の⑵が記されている。

⑵ Thousands upon thousands of people across America and many more across the globe are suffering at the hands of the oil and gas industry.
―*The biography of Josh Fox*（アクセス：2019年３月22日）

つまり，そこから離れる抽象的移動を遂行するにはそれ相応の「労力・努力」が求められることになる一方，とにもそこから「即座に離れる」ことが強調されながらも，代替手段としてたとえばそれが太陽光や水力，地熱・風力といった自然エネルギーを利用した発電を主たる動力源にするのか，はたまたは未知のエネルギー開発に賭けるのか，化石燃料を用いた生活から「隔たり」をもった後の具体的行き先を見据えた発言としてはとりあげられていない。ここに，［get off of NP］の形態が用いられる認知活動の合理が感じられよう。

謝　辞

福井工業大学 入学直哉先生（英語学・歴史言語学），函館大学阿武尚人先生（認知言語学・英語教育学）には拙稿の隅々までお目通し頂き，貴重なご助言ばかり頂きました。さらに，京都外国語専門学校 福森雅史博士（認知言語学，スペイン語学・ポルトガル語学），*Romania-Japan Association of Education and Science* Oana MORIYAMA 氏（教育学・言語心理学）には他言語における同事象表示語句との概念的異同関係を共に検討して頂きました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。

参考文献

Anno, N.（2013）“A Cognitive Teaching Way of English Phrasal Verbs: upon the Experiential Grounding of Spatial Relations,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea,* Vol. 5, 278–286.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Beitel, D. A., R. W. Gibbs and P. Sanders（2001）“The Embodied Approach to the Polysemy of the Spatial Preposition *on,*” in Cuyckens, H. and B. Zawada（eds.）*Polysemy in Cognitive Linguistics,* 241–260.　JJAmsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Bolinger, D.（1977）*Meaning and Form.*　New York: Longman.

Chomsky, N.（1965）*Aspects of the Theory of Syntax.*　Special Technical Report, Massachusetts Institute of Technology.　Research Laboratory of Electronics, No. 11. Cambridge: M.I.T. Press.

Cook, W. A.（1969）*Introduction to Tagmemic Analysis.*（Transatlantic series in linguistics）New York: Holt, Rinehart and Winston.

Coulmas, F.（1992）*Die Wirtschaft mit der Sprache: Eine sprachsoziologische Studie.*（諏訪功他（訳）（1993）『ことばの経済学』．大修館書店：東京．）Berlin: Suhrkamp.

Curme, G. O.（1931）*Syntax.*　New York: Heath.

Fillmore, C. J.（1968）“The Case for Case,” in Bach, E. and Ro.T. Harms,（eds.）*Universals in Linguistic Theory.* 1–88.　New York: Holt, Rinehart and Winston.

Grice, H.（1989）.　*Studies in the Way of Words.*　Cambridge: Harvard University Press.

Gruber, J. S.（1976）*Lexical Structures in Syntax and Semantics.*　Amsterdam: North Holl.

Halliday, M. A. K.（1977）*The Linguistic Sciences and Language Teaching.*（Longman Linguistic Library）New York: Longman.

Hjelmslev, L.（1969）*Prolegomena to a Theory of Language.*　Madison: University

of Wisconsin Press.

Jespersen, O.（1949）*A Modern English Grammar on Historical Principles.* Ⅲ. Heidelberg: Carl Winter.

Jespersen, O.（1984）*Analytic Syntax.* Chicago: University of Chicago Press.

Kruisinga, E.（1931）*A Handbook of Present-Day English,* Vol. 4. P. Groningen: Noordhoff.

Lakoff, G. and M. Johnson（1980）*Metaphors We Live By.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, G. and M. Johnson（1999）*Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought.* New York: Basic Books.

Lamb, S. M.（1966）*Outline of Stratificational Grammar.* Washington D.C.: Georgetown University Press.

Langacker, R. W.（1991）*Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar.* New York: Mouton de Gruyter.

Levi, J.（1986）"Applications of Linguistics to the Language of Legal Interactions," in Peter, C. and V. Raskin.（eds.）*The Real-World Linguist: Linguistic Applications in the 1980s,* 230–265. Norwood: Albex.

Lindstromberg, S.（1997）*English Prepositions Explained.* Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Moriyama, O.（2006）*Influenţa Mass-mediei asupra Comportamentului Adoleşcentului.* Braşov: Universitatea Transilvania: Faculatatea de Psihologie şi Ştiinţe ale Educaţiei.

Moriyama, O.（2017）"A Cognitive Teaching Approach to English Idiomatic Expressions," in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 3, 193–198. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, O.（2018）"A Cognitive Approach to English-vocabulary Education: through the Concepts of Synonymic Expressions," in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 4, 108–113. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2019）"Cognition and Vocabulary Teaching: through the Concept of English Word *charge,*" in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 5, 79–84. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2011）"A Cognitive Teaching Way for Japanese Students: through the Concepts of English Prepositions," in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea,* Vol. 2, 17–24. Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2011）“A Cognitive Study of English Education through Cultural Frame: from a Comparative Perspective with Japanese Identity,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea,* Vol. 3, 98–108.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2012）“Language-Culture Education for Developing the International Bridge between Romania and Japan: from a Didactic Perspective upon Cognitive Linguistics,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea,* Vol. 4, 21–31.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2013）“Nation and Language,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea,* Vol. 5, 45–55.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2014）“A Pedagogic Approach to the Innovation of Global Studies' System at the International Course and the English Seminar of Kinki University: along with the UNESCO's Recommendation concerning International Education,” in Constantinescu, M. et. al., *Omul şi Societatea,* Vol. 6, 8–18.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2015）“A Cognitive Approach to Japanese Popular Culture: through the Love Songs of Koji TAMAKI,” in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 1, 82–87.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2016）“A Basic Study of Cognitive Script concerning Artificial Intelligence: through the Concepts of Information-Technology Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 2, 29–34.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2017）“A Basic Study of Cognitive Script concerning Artifical Intelligence: through the Concepts of CONSICISOUSNESS-MEMORY Expressions,” in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 3, 83–88.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2018）“A Basic Study of Cognitive Script concerning Artificial Intelligence: through KANSEI Communication,” in Oprescu, E. et. al., *Omul şi Universeul,* Vol. 4, 57–61.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T.（2019）“A Cognitive Approach to the Concept of［Fall Victim to NP］: Interfaced with its Syntactic Phase,” in Oprescu, E. et. al., *Omul*

şi Universeul, Vol. 5, 38–43.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T., M. Fukumori, O. Moriyama et al.（2012）*Soarele*（『太陽』）, Vol. 1.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Moriyama, T., M. Fukumori, O. Moriyama et al.（2012）*Soarele*（『太陽』）, Vol. 2.　Râmnicu Vâlcea: Argedava Cultural Association; Casa Artelor Poligrafice Editoriale Rotarexim.

Poutsma, H.（1928）*A Grammar of Late Modern English,* Part I.　2nd ed. Groningen: P. Noordhoff.

Quirk, R. et al.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language.*　London: Longman.

Reba, D.（2010）*Facing Forward －A Life-Reclaimed.*　New York: Mondial.

Talmy, L.（2000）*Toward a Cognitive Semantics: Concept Structuring System*（*Language, Speech and Communication*）.　Cambridge: MIT Press.

Ungerer, F. and H. J. Schmid（1996）*An Introduction to Cognitive Linguistics.* New York: Longman.

池上嘉彦（1975）『意味論―意味構造の分析と記述―』. 大修館書店：東京.

河上誓作（編）（1996）『認知言語学の基礎』. 研究社：東京.

上野義和（1995）『英語の仕組み ―意味論的研究―』. 英潮社：東京.

上野義和（1998）「非構造的な「from＋前置詞」の分析」『SELL』第14号, pp. 1–22, 京都外国語大学英米語学科研究会.

上野義和・森山智浩（2003）『イメージ＆カテゴリーの英単語』. かんぽう：東京.

上野義和・森山智浩（2007）「イメージとカテゴリーによる語彙指導方法の構造改革（その６）― 中学校・高等学校における和訳偏重主義への新提案：多義性のメカニズムと認知言語学導入の研究意義―」『研究論叢』68号, pp.1–26, 京都外国語大学国際言語平和研究所.

上野義和・森山智浩（2012）「異言語教育と言語文化（その４）―メタファー研究の再考と言語文化教育の展開―」『京都外国語大学研究論叢』第79号, pp.1–21. 京都外国語大学国際言語平和研究所.

上野義和・森山智浩他（2002）『認知意味論の諸相―身体性と空間の認識―』. 松柏社：東京.

上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉（2006）『英語教師のための効果的語彙指導法―認知言語学的アプローチ―』. 英宝社：東京.

小西友七（1955）『前置詞（下）』（英文法シリーズ19）. 研究社：東京.

福森雅史（2011a）「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究」（その１）―英語, スペイン語の異言語対照を中心に―」『文学, 芸術, 文化』第22巻第２号, pp. 111–145. 近畿大学文芸学部.

福森雅史（2011b）「図地分化と容器のメタファーに見る「自己」の概念研究」（その２）―英語，スペイン語の異言語対照を中心に―」『文学，芸術，文化』第23巻第１号，pp. 41-95．近畿大学文芸学部.

森秀明（2014）「言語は経済に連動して変化する」『第５回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』，pp. 243-252，国立国語研究所：東京.

森山智浩（2008a）「言語教育への語彙概念導入研究 ―身体経験から現れ出る空間関係づけ概念への認知言語学的アプローチ―」『太成学院大学紀要』第10号，pp. 163-178．太成学院大学.

森山智浩（2008b）「英語動詞 *take* に見る多義性の拡張メカニズムと言語教育―認知言語学的アプローチによるメタ・プロセス理論を通して―」『近畿大学英語研究会紀要』第２号，pp. 79-98．近畿大学英語研究会.

森山智浩（2015）「［Enter into NP］の概念研究―認知言語学的アプローチ―」『近畿大学 法学』第62巻第３・４号，pp. 187-245．近畿大学法学会.

森山智浩（2016）「［Depend on NP］の概念研究―認知言語学的アプローチ―」.『文学，芸術，文化』第28巻第１号，pp. 23-69．近畿大学文芸学部.

森山智浩（2018）「［Look down on NP］の概念研究―認知言語学的アプローチ―」.『近畿大学 法学』第65巻第３・４号，pp. 43-92．近畿大学法学会.

森山智浩（2019）「［Cheat on NP］の概念研究―認知言語学的アプローチ―」.『近畿大学 法学』第66巻第３・４号，pp. 191-237．近畿大学法学会.

森山智浩・髙橋紀穂・森山オアナ　他（2010）『英語前置詞の概念―認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から―』（FD 語学教育改革シリーズ１）．ブイツーソリューション：愛知.

森山智浩・中桐謙一郎・福森雅史・小山政史・森山オアナ（2012）『Let's Vocabucize 1000！―イメージと映画で学ぶ英単語総合演習帳―』．松柏社：東京.

【Dictionaries】

［*AEGU*］Leech, G. N.（ed.）（1989）*An A-Z of English Grammar & Usage.* New York: Thomas Nelson and Sons.［*COD*］Stevenson, A., M. Waite（eds.）*Concise Oxford Dictionary.* London: Oxford University Press.

［*DELP*］瀬戸賢一他（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』．小学館．東京.

［*DEWME*］小島義朗他（編）（2004）『英語語義語源辞典』．三省堂．東京.

［*GEJD*］小西友七・南出康世（編）（2002）『ジーニアス英和大辞典』．大修館：東京.

［*KDEE*］寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』．研究社：東京.

［*LDCE*］Quirk, R.（ed.）（1987）*Longman Dictionary of Contemporary English.* London: Longman.

［*OALD*］Hornby, A. S.（ed.）（1995）*Oxford Advanced Learner's Dictionary.* London: Oxford University Press.

［*OED*］Burchfield, R. W.（ed.）（1978）*The Oxford English Dictionary.* Oxford: Clarendon Press.
［*RHED*］小学館ランダムハウス英和大辞典第二版編集（編）（1993）『ランダムハウス英和大辞典』. 小学館：東京.
［*WEJD*］井上永幸・赤野一郎（編）（2002）『ウィズダム英和辞典』. 三省堂：東京.

【TV シリーズ】

Cartoon All-Stars to the Rescue（1990）, Academy of Television Arts and Sciences.
Cartoon Monsoon, Episode: “Oh, Shoot !: Director's Cut”（2003）, Warner Brothers Animation.
Count Duckula, Episode: “In Arctic Circles”（1989）, Cosgrove Hall Films.
Doctor Who, Episode: “An Unearthly Child”（1963）, British Broadcasting Corporation.
Family Guy, Episode: “A Lot Going on Upstairs”（2016）, 20th Century Fox Television.
Frasier, Episode: “Miss Right Now”（2004）, Grub Street Productions.
Gillmore Girls, Episode: “That's What You Get, Folks, for Making Whoopie”（2012）, Dorothy Parker Drank Here Productions.
Lost, Episode: “LaFleur”（2009）, Bad Robot.
90210, Episode: “Mother Dearest”（2010）, Sachs/Judah Productions.
Poirot, Episode: “Taken at the Flood”（2006）, Carnival Film & Television.
Real Time with Bill Maher, Episode: “#16.34”（2018）, Bill Maher Productions.
Stargate: Atlantis, Episode: “Phantoms”（2006）, Acme Shark.
Star Wars, Episode: “A New Hope”（1977）, Channel Awesome.
Star Wars: Clone Wars, Episode: “Ambush”（2008）, CGCG.
True Blood, Episode: “Hitting the Ground”（2010）, Your Face Goes Here Entertainment.
Under the Dome, Episode: “Heads Will Roll”（2014）, Amblin Television.
Young Justice, Episode: “Fireworks”（2010）, DC Comics.

【Film DVDs】

A Shot in the Dark（1964）, The Mirisch Corporation.
Closely Watched Trains（1966）, Filmove studio Barrandov.
Colorado Territory（1949）, Warner Brothers.
Driving Miss Daisy（1989）, The Zanuck Company.
Fog, The（1980）, Embassy Pictures.
Good Will Hunting（1997）, Be Gentlemen Limited Partnership.

Heartbreak Ridge（1986）, Jay Weston Productions.
It's a Wonderful World（1939）, Metro-Goldwyn-Mayer.
Kingsman: The Secret Service（2014）, Twentieth Century Fox.
Lucas（1986）, Twentieth Century Fox.
Much Ado about Nothing（1993）, Renaissance Films.
1776（1972）, Columbia Pictures Corporation.
Others, The（2001）, Cruise/Wagner Productions.
Ray（2004）, Universal Pictures.
Riffraff（1936）, Metro-Goldwyn-Mayer.
Social Network, The（2010）, Columbia Pictures.
Street Trash（1987）, Street Trash Joint Venture.
Twins（1988）, Universal Pictures.
VAmL（2009）, Eyeris Pictures.

【Websites】

Biography of Josh Fox, The
URL: https://www.imdb.com/name/nm1068198/bio?ref_=nx_sq_sr_1#quotes
Columbus Jewish Historical Society
URL: http://columbusjewishhistory.org/oral_histories/harry-schwartz/
Daily News（Febuary 26th, 2019）
URL: https://newsdaily.today/are-electric-vehicles-ready-for-the-mainstream-in-canada/
Dictionary.com
URL: https://www.dictionary.com/browse/off
Mail Online News（August 18th, 2016）
URL: https://www.dailymail.co.uk/news/article-3745228/Coast-Guard-scramble-save-ferry-500-board-catches-fire-mile-Puerto-Rico.html
Researchers in Science for Equality
URL: https://rise.nu/2017/03/31/rise-in-the-spotlight-rise-in-japan/
US National Library of Medicine National Institutes of Health
URL: https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC1484530/